

川上郁雄著『JSL バンドスケール【小学校編】

—子どもの日本語の発達段階を把握し、ことばの実践を考えるために』

(2020、明石書店)

<サンプル>

小学校 低学年

【話す】

小学校 低学年 話す レベル1

このレベルの主な特徴	初めて日本語を話すレベル
子どもの様子・ ことばのやりとり	<ol style="list-style-type: none">1. 言いたいことが言えず、身振りで伝えようとする。2. ものの名前や単語を一つ、言える（一語文）。3. 一語文、二語文で意味を伝えようとする。4. 教師や他の子どもが言った単語や語句をそのまま繰り返す。5. 日本語の代わりに、第一言語で話したり、答えたりする。6. 学習活動の中で、身振りで応えたり、他の人の行動を真似たりすることがある。7. 周りを注意深く観察するが、話さない場合もある。8. 第一言語で獲得した会話のスキルをもとに、コミュニケーションをとろうとする。9. 日本語を「話す」力はなくても、第一言語で「話す」力がある場合がある。第一言語を使う家庭・地域社会などでは、子どもの年齢に応じた範囲で、第一言語を話すことができる。ただし、個人差がある。

解説① 「第一言語の力」:

家庭や同じ第一言語を話す友だちの間では、第一言語を、自信を持って話す子どもがいます。そのことは、日本語を学ぶことにも有効に働きます。第一言語で話す経験や第一言語から得た知識が「話す」力の基礎をつくると考えられます。

ただし、日本生まれで、複数の言語の間で成長する子どもの場合、その第一言語の力が弱いことがあります。個人差がある点にも留意することが大切です。

3の例:

「その本、見せて」「この本、読んでもいい？」などの意味で、ただ「ほん」と言う。

5.

第一言語で答えるのは、第一言語によるコミュニケーション能力があるということを意味する。必ずしも不適応を起こしているわけではない。

7

これを「沈黙期間」という。
→小学校低学年「聞く」レベル1を参照。

8

第一言語を使うときに獲得した、状況に応じた表情や態度で、人に接しようとする。

指導上のポイント:

このレベルの子どもたちに、無理に話させようとする必要はありません。具体物や動作を示しながら、短い言葉をシャワーのようにかけてあげることが、このレベルでは大切です。子どもにとって、楽しく興味のある活動を提供することが大切です。

小学校 低学年 話す レベル2

このレベルの主な特徴	よく耳にする日本語表現を使い始めるレベル
子どもの様子・ ことばのやりとり	<ol style="list-style-type: none">1. 身近な場面で使う挨拶などの日本語を覚え、使い始める。2. 身振りや具体物に頼ってコミュニケーションを行い、それをわかってくれる人と行動をともにする。3. 質問を繰り返したり、他の子どもの発言を真似たりする。4. 物語や詩、歌にある短い語句を繰り返すような活動に参加することができる。5. 意味を伝えるために、日本語のイントネーションなどを使い始める。6. 自分勝手に語句を組み合わせたりする。7. 第一言語で獲得した会話のスキルをもとに、コミュニケーションをとろうとする。8. 第一言語に関わる文化的知識や態度、価値観を持っていることがある。9. 日本語を「話す」力はなくても、第一言語で「話す」力がある場合がある。第一言語を使う家庭・地域社会などでは、子どもの年齢に応じた範囲で、第一言語を話すことができる。ただし、個人差がある。

解説② 「わかってくれる人と、行動をともにする」とは：

子どもは自分の言うことを聞いてくれる人と一緒にいたいと思い、よく行動をともにします。それは、たとえ日本語がうまく言えなくても、心が通じ合っていると実感するからです。この実感が、「ことばの力」を育みます。相手に伝えたいと思う気持ちと、相手の言いたいことを受け止めようとする姿勢を育てることが重要です。

1の例：

「おはよう」「はい」「だめ」等

2.

クラスメイトと一緒に遊びたくても、うまく言えなくて、「いっしょにあそぼう」と言うつもりで、その子の肩を叩いたりする。そのため、クラスメイトに「乱暴」な印象を与えることがある。

5の例

- ・疑問を表すために、「これ、ほん(の)」と言う。
- ・「ほん(の)、これ、」と語順が不正確なこともある。

6の例

- ・「いいえ」「ちがう」の意味で、「じゃない、じゃない」と言う。
- ・「きれいでない」「きれいじゃない」の意味で、「きれくない」と言う。

指導上のポイント：

上記6の例の「じゃない、じゃない」は、「・・・じゃない」と誰かが言うのを聞いて、その部分が否定的な意味と理解し、それを記憶しておいて、「いいえ」「ちがう」と言いたい場面で、それを使っているのです。それはしっかりした「ことばの力」と見ることもできます。このように、子どもの誤用は言語習得の過程と見るのが大切です。

小学校 低学年 話す レベル3	
このレベルの主な特徴	「身近な話題」について、簡単な日本語でやりとりができるようになるレベル
子どもの様子・ ことばのやりとり	<ol style="list-style-type: none"> 1. 挨拶や簡単な教室内の指示を理解し行動することができる。 2. 絵や具体物をたよりに、身近なことや好きなことについて、やりとりすることができる。 3. 教師の質問に短く答えることができる。 4. 日常会話において、二語文、三語文から、徐々に自分の日本語で話し出す。 5. しかし、在籍クラスの授業では、教師とクラスメイトの会話に参加することは難しい。 6. 限られた日本語力しかないので、言いたいことを日本語でどのように言うか考えるために時間がかかる。そのため、簡単なことを言う場合も、考えながら、あるいはつかえながら話す。 7. 第一言語で獲得した会話のスキルをもとに、コミュニケーションをとろうとする。 8. 第一言語に関わる文化的知識や態度、価値観を持っていることがある。 9. 日本語を「話す」力はなくても、第一言語で「話す」力がある場合がある。第一言語を使う家庭・地域社会などでは、子どもの年齢に応じた範囲で、第一言語を話すことができる。ただし、個人差がある。

解説③ 日本語の力がつくと、態度が変わる：

このレベルでは、子どもが日本語で学習をし始めるレベルです。子どもは、語彙が少しずつ定着し、自分の好きなことや嫌いなこと、家族のことや好きなペットなどについて、短く言えるようになります。性格にもよりますが、子どもによっては、自分なりの日本語を使って、積極的に話そうとする様子が見られたり、友だちと積極的に一緒に遊んだりするようになります。日本語の力がつくと、行動の範囲も、様子も変化します。

「身近な話題」→「聞く」レベル3を参照。

2、3の例：動詞の活用や助詞がまだうまく使えない。

教師：「きのう、何をしましたか？」

子ども：「こおりおに、する。」

教師：「へえ、氷鬼したんだ。だれと？」

子ども：「・・・〇〇ちゃん。」

6の例：

教師：「宿題、しましたか？」

子ども：「宿題、した。けど、家に忘れた。」

教師：「どうして、忘れたの？」

子ども：「えーと、夜、やったけど、えーと、・・・、朝、学校、くるとき、えーと・・・。」

指導上のポイント：

遊んでいるときに、日本語がたくさん出ます。それは、目の前に具体物があり、日本語の意味が理解されやすい文脈が見えるからです。「見える文脈」を利用して、日本語の意味と使い方を体得できるように指導することが大切です。誤用を訂正するより、子どもの表現したい内容と心を受けとめることが大切です。

小学校 低学年 話す レベル4

このレベルの主な特徴	「身近な話題」から、「目の前にないもの」についても日本語で話そうとするレベル
子どもの様子・ ことばのやりとり	<ol style="list-style-type: none">1. 既に学習した内容について、簡単な質問に答えることができる。2. よく聞いてくれる相手がいれば、自分の生い立ちや最近の出来事などについて、話すことができる。その話を、支援があれば、短くではあるがみんなの前で発表することができる。3. ただし、使える接続詞はわずかで（けど、だって、でも、等）、在籍クラスの授業で教師の質問に的確に答えるにはまだ困難がある。4. クラスメイトが使うような表現（～でね・うーんとね・～じゃん・でもさー、等）を使いながら話を続けることができるが、長い談話は途切れがちで、より正確に言おうとすると、ブツブツと途切れる。5. 知っている日本語を駆使して日本語を使用しようとするので、正確さに欠ける（たとえば時制の使い方）が、理解できないほどではない。6. 助詞はまだ習得途中で、助詞が抜けたり、助詞を適切に使えなかったりすることもある。7. 第一言語で獲得した会話のスキルをもとに、コミュニケーションをとろうとする。8. 第一言語に関わる文化的知識や態度、価値観を持っていることがある。9. 第一言語による「話す」力がある場合がある。第一言語を使う家庭・地域社会などでは、子どもの年齢に応じた範囲で、第一言語を話すことができる。ただし、個人差がある。

解説④ 「もう指導は必要ない」と思うとき：

このレベル4は、子どもが習った日本語を試そうとするレベルです。「生い立ちや空想、絵本を読んで考えたこと、以前に体験したことなど、目の前にないことも話そうとするようになります。ただし、その発言は、文としての結束性は不十分で、正確さに欠けます。レベル1の子どもの様子から比べると、教師と子どもの間では意志の疎通ができるようになるため、「もう指導は必要ない」と判断することもあります。依然、継続的な支援が必要な段階です。

1の例：動物の特徴について学習した後の会話。

教師：「この動物の名前、覚えている人？」

子ども：「えーと、しま・・・しまうま。」

教師：「どうして、わかったの？」

子ども：「いろで。しろとくろ。」

2、4の例：

教師：「〇〇ちゃんの生まれたところって、どんなところ？」

子ども：「私が生まれたのは、大きな町で、いっぱい人がいて、けっこう暑かった。」

教師：「すごく暑いのか？」

子ども：「うーんとね、どれくらい、暑いかっていうと、えーっと、かなり暑いです。」

教師：「何度ぐらいになりますか。たとえば、夏・・・」

子ども：「うーんとね。たぶん、30度くらい？ でもさ、日本と同じくらいかなあ。」

指導上のポイント：

このレベルの子どもは、日本語でやりとりし、他の人と交流できることを実感し始めます。積極性も出てきて、間違いをおそれず話し出します。そのときは、その勇気をほめてあげ、間違えても訂正せずに聞いてあげることも支援のひとつです。教師は、さりげなく正しい日本語で答えるなど、暗示的な訂正の仕方も工夫しましょう。

小学校 低学年 話す レベル5	
このレベルの主な特徴	さまざまな生活場面で日本語を使用する力が定着してきているが、学習場面では表現する力はまだ限られているレベル
子どもの様子・ ことばのやりとり	<ol style="list-style-type: none"> 1. 身近な話題であれば日常的に行われている主な教室活動に参加することができる。 2. ロゴもりや言い間違いなどがなく、イントネーションやアクセントに正確さが増し、流暢に話す。 3. 接続詞を的確に使うことができる。 4. ただし、在籍クラスで、教師が通常の話速で話し、馴染みのない話題が展開される場合には、会話に参加できないことがある。 5. 学習場面において、複雑な内容や概念を日本語で表現することが困難な場合がある。 6. 語彙は増えているが言語表現は限られており、深い内容は表現できない場合がある。 7. 第一言語で獲得した会話のスキルをもとに、コミュニケーションをとろうとする。 8. 第一言語に関わる文化的知識や態度、価値観を持っていることがある。 9. 第一言語による「話す」力がある場合がある。第一言語を使う家庭・地域社会などでは、子どもの年齢に応じた範囲で、第一言語を話すことができる。ただし、個人差がある。

解説⑤ 「深い内容」とは何か：

このレベルの子どもは、日常生活のあらゆる場面で、よく話しますので、他のクラスメイトと同じように見えます。そのため、教師はその子に対して日本語指導の支援が必要でないと考えがちです。しかし、注意深く発言を聞くと、話の展開や文の結束性に欠如があり、複雑な考えや事柄を十分に話せない場合があります。子どもは、語彙や表現がある程度身につけてくると、その範囲内でやりとりし、やりすごしてしまいます。そのため、小学校低学年の子どもの認知発達のレベルで期待される内容（未来や仮定の内容等）を的確に表現できず、話している内容に「深さ」が感じられない場合があります。その点が、このレベルの子どもの新たな課題になります。

「なぜ学習場面では理解が難しいのか」→小学校低学年「聞く」レベル5を参照。

1、2の例：

- ・教室での話し合いなどで、自分の考えを述べる。
- ・学習成果の発表などにおいて、自分の意見や考えをクラスに向けて発表することができる。
- ・ただし、考えながら話している場合、話すスピードがゆっくりになることもある。

6の例：

- ・「～するとき」「～してから」等の時間の前後関係を表す表現。

指導上のポイント：

小学校低学年の学習活動では、話す課題や書く課題が限られています。そのため、一人ひとりの子どもの「話す」力や「書く」力を把握しにくい面があります。子どもの書いた作文などをもとに、子どもの説明を丁寧に聞くような機会を設けることも有効でしょう。「話す」力は、発達している部分とそうでない部分があり、まだらに発達します。

小学校 低学年 話す レベル6	
このレベルの主な特徴	生活場面で日本語を十分に使えるようになるが、学習場面では表現できない部分があるレベル
子どもの様子・ ことばのやりとり	<ol style="list-style-type: none"> 1. 年齢と学年に応じた生活場面や学習場面に、積極的に参加することができる。 2. 教師やクラスメイトの助けをほとんど借りずに自分自身の考えや意見を述べることができる。 3. 学習内容が知らないことであっても、内容や語彙がきちんと教えられればより複雑な考えが理解でき、かつ表現できる。また他の人にそれを説明することもできる。 4. 複雑な表現や微妙な表現を運用する力が育ちつつある。 5. ただし意図を正確に表現することは依然として困難な場合がある。 6. 何かを伝えるときに必要な語彙がわからない場合でも、既に学習した語彙を使って何とか伝えることができる。 7. 第一言語で獲得した会話のスキルをもとに、コミュニケーションをとろうとする。 8. 第一言語に関わる文化的知識や態度、価値観を持っていることがある。 9. 第一言語による「話す」力がある場合がある。第一言語を使う家庭・地域社会などでは、子どもの年齢に応じた範囲で、第一言語を話すことができる。ただし、個人差がある。

解説⑥ 「話す」力とは何か：

「話す」力は、単に「ひとりでしゃべる力」ではありません。実際のコミュニケーションの場面では、話し手と聞き手との関係や話す場を理解し、話題に関する情報や知識、話の流れなど、多様な条件を理解する力が「話す」力に影響します。「話す」力も、総合的なコミュニケーション能力なのです。

→ 小学校低学年「聞く」レベル6参照。

4、5の例：

「かもしれない」「～しかない」「～もある・」「まだ」「もう」「～たら」「～すれば」「らしい」「ようだ」「～するとき」「～してから」「～するとき」「～してから」等を使えるようになるが、常に正確に使えるわけではない。

7の例：

母国で習った計算の方法を、日本での算数の勉強に活かそうとする等。
(ただし、このレベル以外でも同様のことが見えることがある)

指導上のポイント：

コミュニケーションのポイントは、話す人と聞く人の関係づくりです。関係性があるところでは、「伝えたい」「聞きたい」という気持ち生まれ、その結果、「話す」力も「聞く」力も伸長します。「話す」力は人と人の関係性に依存します。在籍クラスでも、一人ひとりの子どもを認め合う風土がなければ、子どもたちの「話す」力は伸張しません。

小学校 低学年 話す レベル7	
このレベルの主な特徴	日本語を十分に使用することができるレベル
子どもの様子・ ことばのやりとり	<ol style="list-style-type: none"> 1. 年齢と学年に応じた生活場面や学習場面で、流暢かつ正確に、口頭でコミュニケーションができる。 2. 社会文化的な経験や知識が足りずに理解できないときは、質問することができる。 3. 日本語で正確な言い方を知らない場合には、別の言い方で手際よく説明することができる。 4. 第一言語で獲得した会話のスキルをもとに、コミュニケーションをとろうとする。 5. 第一言語に関わる文化的知識や態度、価値観を持っていることがある。 6. 第一言語による「話す」力がある場合がある。第一言語を使う家庭・地域社会などでは、子どもの年齢に応じた範囲で、第一言語を話すことができる。ただし、個人差がある。

解説⑦ 「日本生まれの、日本語を学ぶ子どもたち」:

日本生まれで、生まれたときから複数言語環境で成長しながら、小学校入学前に保育園や幼稚園で過ごしている子どもたちが増えています。そのような子どもは一見、日本語だけで成長した子どもと変わらないように日本語を聞いたり話したりする力があるように見える場合がありますが、「読む」力、「書く」力が弱い子どももいます。「聞く」「話す」が6あるいは7レベルでも、「読む」「書く」が2あるいは3レベルということもあります。ひとりの子どもの中でも、4技能のレベルが異なることがあります。ことに留意しましょう。

2

日本の童謡や昔話などに出てくる日本の伝統的な生活習慣や文化的事項についてよく知らないため、うまく使えない語彙もある。

例：伝統的な日本の衣・食・住に関する言葉、伝統的な行事に関する言葉等。

指導上のポイント：

日本語を学ぶ子どもたちは、他のクラスメイトと同じ体験や文化的理解をしているとは限りません。そのため日本語自体に問題がないように見えても、意思を十分に理解し合うことができないときもあります。その意味で、小学校低学年では、体験にもとづく学習（体験学習）がより重要になります。体験を通じて、日本語の意味と表現を豊かに深めていく実践が必要です。